
隣人の告白

めくじら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣人の告白

【Zコード】

Z6986A

【作者名】

めぐじり

【あらすじ】

突然訪れた変わった一日。よかつたら見てやって下さい。

それは、突然の出来事だった。自分でもいまなぜこんなことをしているのかわからない。

いつも思っていた。毎日がつまらないと。今もそなのかといわると答えはイエスだ。

あいつは真夏の日差しがまぶしい朝に俺の家を訪ねてきた。見ただことがあるような顔だったが最初は思い出せなかつた。そいつは俺を見るなりこう言うのだ。私は隣に住んでいるサンタクロースだ。手伝つて欲しい、と。

・・・当然信じるはずもなかつた。しかし、俺は繰り返しの毎日に現れたかすかな変化に興味をもつた。誰かが自分をだまそうとしているのかもしれない、俺はその可能性を今まで捨てきれない。それでも、その時そいつは真剣だつた。何を思ったか、俺はそいつを家に招きいれた。

話だけを聞くとアホくさいような事だつた。クリスマスの夜に送るはずだつた少年のプレゼントがたつた今完成したというのだ。そのプレゼントとはなんなのか、何度聞いても教えてくれなかつた。俺は、教えなれば手伝わない、と言つた。今、考えればあまりに幼稚だ。しかし、それでも教えようとはしなかつた

その代わり、俺はそいつとある約束を結んだ。もし、手伝つてくれるならプレゼントを渡すとき、俺にそのプレゼントを見せるといふのだ。確かに興味はあつた。だが、それを知るために協力しなければならないことを考へると踏み出しにくいのも事実だつた。

自称サンタクロースは、迷つてゐる俺に言つ。

これは君にとって暇つぶしに過ぎないだろ、しかし、考へても

見たまえこのプレゼントが届かなかつたときの少年の落胆と失望を。私にはそれが耐えられないのだよ。それとも君は、断らなければならぬほど忙しいのかな？違うだろう。君にはあるはずだ。その時間が・・・。

俺は言葉をなくした。認めたくないがその通りだつた。今思い出してみると俺はこのときから少しずつ信じ始めていたのかも知れない。もしも、手伝う気があるなら今日の夜中の十時頃とある病院の裏門に来てくれと言い残してそいつは去つていつた。

それからは、食事のときも、テレビを見ているときも一日中そのことについて考えていた。でも、答えはすでに出ていた。

俺はなぜか人目を気にして家を出た。その病院は歩いて数キロのところにある。夏の夜は意外に涼しかつた。疲れはなく、奇妙に聞こえるかもしれないが楽しかつた。遠足に行く子供の期待の足取りのように。門の前にそいつはいた。来ることがわかつていつたかのように俺を迎えた。

裏門は開いていた。隠れるそぶりもなく、病院の中へ入つていく。もつすぐ、面会終了の時間だ。しかし、入ってきた俺たちに見向きもせず、看護婦は事務を続けている。病院の中は明るいが外はもう真つ暗になつてゐる。あちこちに紙で作ったリングヒツリーのシールが見栄え良く飾られていた。

301号室の前でそいつは止まつた。どうやら個室のようだ。なかなか声が聞こえる。夫婦喧嘩かなにか知らないが、俺はそれを聞いていてなんとなく氣分が悪くなつた。自称サンタクロースはチラツと俺のほうを見ると、また向き直りスライドドアを開けて中に入る。俺もそれに続いた。いよいよだと思つた瞬間だつた。

あなたにわかるだろうか、俺の気持ちが・・・。目の前に俺がいた。そこにいたのは少年時代の自分だつた。言い合ひを続ける夫婦

は俺の両親だった。思い出した。俺は小さいころの身体が悪く、よく入退院を繰り返していた。そのことで両親はよく喧嘩していた。

そこにいる俺は悲しそうな表情で外を見ていた。雪が降っていた。誰にも俺たちの姿は見えていなかつた。部屋の隅には小さなクリスマスツリーが飾られていた。俺とあいつはただの傍観者だった。やがて、両親は小さい俺に何も言わず部屋を出て行つた。扉が閉まると少年は糸が切れたように泣き始めた。いつまでも泣いていた。俺たちは部屋を出た。

俺は病室の向かい側にある椅子に座つた。あいつは言つた。

さあ、約束だつたな。彼へのプレゼントを見せようか・・・そ

ういつて、いつのまにか持つていた小さな袋に手を入れた。

俺は言つた。

あなたは本当にサンタクロースなのか？

そいつは袋に手を入れたまま黙つている。

・・・いや、違うよ。あなたはそうじやない・・・。そうじやなくともいい・・・。俺は顔を両手で覆つて言つた。

・・・ありがとうございます。・・・プレゼントは見ない。彼にあげてくれ・・・。そういうと、あいつは俺に笑顔を作つて、そしてもう一度部屋に入つていった。そして、しばらくしてドアが開く。

そこに立つているのは小さい自分だった。少年はこっちを見た。

俺は思わず立ち上がつた。少年は俺を見ている。

・・・俺は昔ずっと言つて欲しかった言葉があつた。・・あの時あの言葉があれば・・・。

「・・あの、・・・あのわ、・・・メリークリスマス。誕生日おめでとう・・・」

ややいな言葉を受け、少年はうれしそうにして部屋に戻つていつ

た。しばらくすると、また扉が開き今度はあいつが出てきた。気になつて中をのぞくと、もう少年は寝ていた。満足そうな寝顔だった。あいつはゆっくりとドアを閉め、病院の出口へ歩き出す。俺はその後をついて歩く。

今度は正門を通り病院を出ると雪はもうやんでいた。暗い道を歩いて家に着くと俺は自分の家こそいつも隣の家に入つていった。今はそつにになつた。

実に不思議な体験だった。最近はそいつとはたまに顔をあわす程度だ。以前と何も変わらない。でも、変わっていくのかもしけない。

(後書き)

「J愛読ありがとう」「やせこました。至らない点は々々あつたと想いま
すが、読者の心に何か少しでも残つていただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6986a/>

隣人の告白

2010年12月10日20時48分発行